(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号
特許第3615643号
(P3615643)
(45)発行日　平成17年2月2日(2005.2.2)　(24)登録日　平成16年11月12日(2004.11.12)

(51)Int.Cl.[7]　F I
A61H 39/08　A61H 39/08　B
A61H 39/08　H

請求項の数 1　(全 6 頁)

(21)出願番号　特願平9-163932
(22)出願日　平成9年6月20日(1997.6.20)
(65)公開番号　特開平11-9654
(43)公開日　平成11年1月19日(1999.1.19)
審査請求日　平成12年11月29日(2000.11.29)

(73)特許権者　593128851
大宝医科工業株式会社
広島県広島市安佐北区三入一丁目２５番９号
(74)代理人　100081477
弁理士　堀　進
(72)発明者　須山　健司
広島県広島市西区己斐東２丁目３０－１４

審査官　田中　玲子

(56)参考文献　特開平０８－１１２３３１（ＪＰ，Ａ）
実開昭５７－１１３１４１（ＪＰ，Ｕ）
実開昭５５－０１６１０２（ＪＰ，Ｕ）

最終頁に続く

(54)【発明の名称】治療具

(57)【特許請求の範囲】
【請求項１】
針部と柄部とを結合してなる治療鍼と、該治療鍼を移動自在に収納した状態で両端が密閉された筒状体とからなる治療具において、
前記治療鍼は、前記柄部の前記針部との結合部付近に第１の異型部を有し、
前記筒状体は、前記治療鍼の柄部側の密閉端付近に設けた第１の折り離し可能部と、収納した治療鍼の柄部と針部との結合部付近の位置に設けた第２の折り離し可能部との間に針管部を形成すると共に、該針管部の前記第１の折り離し可能部付近の内周面の少なくとも一部に第２の異型部を、前記第１の折り離し可能部の密閉端側の内周面の少なくとも一部に第３の異型部をそれぞれ有し、
前記筒状体の第１及び第２の折り離し可能部を夫々折り離したとき、前記針管部は前記治療鍼の針部全体を覆う位置まで移動可能であり、前記治療鍼の第１の異型部に前記針管部の第２異型部が係止されることにより前記針管部が前記治療鍼から抜け落ちないように構成され、
前記第１の折り離し可能部を折り離すことにより折り離された端部を前記治療鍼の柄部に嵌め込んだとき、前記第３の異型部が当該端部を前記柄部に固着する固着部として機能することを特徴とする治療具。
【発明の詳細な説明】
【０００１】
【発明の属する技術分野】

本発明は、鍼治療に用いられる治療具に関する。

【０００２】

【従来の技術】

従来、鍼治療は、鍼の先端がツボを刺激して身体のバランスを整える治療法であるが、細い鍼の先端を指で支えて皮膚にあてがい刺し込むか、或いは針管と呼ばれる細管を皮膚にあてがい、針管の中に針を挿入してそのまま皮膚に刺し込む方法が採られている。

【０００３】

上記のように鍼は身体に刺し込まれて用いられるものであるから、鍼の先端部が治療者の手に触れたり露出状態になることは好ましくなく、通常は容器に密閉された状態で取り引きされている。

【０００４】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、鍼を密閉された状態で購入しても、治療の際には、密閉容器から取り出し、前述のように治療者が鍼の先端部を指で支えて皮膚に刺し込んだり、露出した鍼の先端を指で支えて針管に挿入していた。

【０００５】

本発明は、治療時まで密閉状態を保持でき、治療に際しても治療者の指が鍼に触れることがない鍼治療用の治療具を提供することを目的としている。

【０００６】

【課題を解決するための手段】

本発明は、針部と柄部とを結合してなる治療鍼と、該治療鍼を移動自在に収納した状態で両端が密閉された筒状体とからなる治療具において、

前記治療鍼は、前記柄部の前記針部との結合部付近に第１の異型部を有し、

前記筒状体は、前記治療鍼の柄部側の密閉端付近に設けた第１の折り離し可能部と、収納した治療鍼の柄部と針部との結合部付近の位置に設けた第２の折り離し可能部との間に針管部を形成すると共に、該針管部の前記第１の折り離し可能部付近の内周面の少なくとも一部に第２の異型部を、前記第１の折り離し可能部の密閉端側の内周面の少なくとも一部に第３の異型部をそれぞれ有し、

前記筒状体の第１及び第２の折り離し可能部を夫々折り離したとき、前記針管部は前記治療鍼の針部全体を覆う位置まで移動可能であり、前記治療鍼の第１の異型部に前記針管部の第２異型部が係止されることにより前記針管部が前記治療鍼から抜け落ちないように構成され、

前記第１の折り離し可能部を折り離すことにより折り離された端部を前記治療鍼の柄部に嵌め込んだとき、前記第３の異型部が当該端部を前記柄部に固着する固着部として機能することを特徴とする。

【０００７】

【作用及び効果】

本発明によれば、治療鍼は筒状体に収納され、筒状体の両端は密閉されているから、治療鍼は露出していない。密閉された筒状体には、折り離し可能部が２か所に、すなわち第１及び第２の折り離し可能部が設けられ、その間の筒状体は針管部として構成されている。従って、折り離し可能部を折り離すことにより針管が形成されるので、治療の際に別の針管を用意する必要はない。筒状体において治療鍼の柄部側の端部寄りに設けられた第１の折り離し可能部の付近で針管の内周面の少なくとも一部に設けられた第２の異型部が、治療鍼の第１の異型部に係止されるので、治療鍼に沿って移動自在な針管は、治療鍼の針部先端の方向へ抜け落ちることがない。従って、治療を行う者は、針管を手で支えて皮膚にあてがい、針管に覆われている針部先端を皮膚に刺し込むことができる。こうして、針部の先端を全く外部に露出することなく鍼治療を行うことができる。

【０００８】

また、筒状体の第１の折り離し可能部を折り離した後、第２の折り離し可能部を折り離す際、筒状体に収納されている治療鍼を、既に折り離した第１の折り離し可能部の方に移動

させるが、その際、治療鍼の柄部の第１の異型部が針管の第２の異型部に係止されることにより、治療鍼が筒状体から抜け落ちるのを防止する。

【０００９】

更に、前記筒状体の第１の折り離し可能部の密閉端側の内周面の少なくとも一部に第３の異型部を設けたことで、折り離した密閉端を治療鍼の柄部に嵌め込み固着することができ、使用時には、治療鍼を持たずに針管を持つことがあっても、治療鍼が針管から抜け落ちるのを防止することができる。

【００１０】

【発明の実施の形態】

図１は本発明の治療具を構成する治療鍼及び筒状体の平面図であり、図２は筒状体の正面図、図３は筒状体の一部の拡大断面図であり、図４は図３のIV－IV線端面図、図５及び図６は前記図で示した治療具の使用状態の斜視図である。

【００１１】

図１に示すように、治療具１は、治療鍼１０と合成樹脂製の筒状体２０とからなる。治療鍼１０は筒状体２０の内部に収納され、筒状体２０の両方の端部２１及び２２は圧着密閉されている。治療鍼１０は、針部１１と円柱状の柄部１２とを結合して構成され、針部１１が筒状体２０の一方の端部２１側を向き、柄部１２が他方の端部２２側を向いた状態で、筒状体２０に収納される。筒状体２０の中空部は治療鍼１０の全長よりやや長く、治療鍼１０を長さ方向へ移動させることが可能である。

【００１２】

治療鍼１０の柄部１２には、針部１１との結合部付近に第１の異型部１３が設けられている。第１の異型部１３は、円柱状柄部を上下方向及び左右方向から交互に２回ずつ噛み締めて形成され、該当部が夫々左右方向及び上下方向に円柱状柄部の外周より突出している。

【００１３】

筒状体２０には、他端部２２寄りに外周面方向から内周面方向への切り込みからなる第１の折り離し可能部２３が設けられている。筒状体２０のほぼ中央にも、同様の第２の折り離し可能部２４が設けられている。この第２の折り離し可能部２４の位置は、筒状体２０の中に収納されている治療鍼１０の針部１１と柄部１２の結合部付近である。第１の折り離し可能部２３と第２の折り離し可能部２４との間の部分は、針管部（針管）２５を構成している。また、第１の折り離し可能部２３から他端部２２に至る部分２２’は、後述するキャップを構成する。

【００１４】

筒状体２０の第１の折り離し可能部２３の付近の内周面には、第２の異型部２６及び第３の異型部２７が設けられている。図３の断面図及び図４の端面図に示すとおり、各異型部２６，２７は、筒状体２０を外側から型押しして壁の一部を内側に突出させて形成され、内周面の同一円周上に各３か所設けられている。針管部２５に設けられた第２の異型部２６は、前記治療鍼１０の柄部１２の第１の異型部１３の移動を阻止する形状及び大きさである。また、キャップ２２’に設けられた第３の異型部２７は、キャップ２２’を前記治療鍼１０の柄部１２に被せたとき、キャップ２２’を柄部１２に固着できる形状及び大きさである。

【００１５】

次に、上記のように構成された治療具の使用方法について説明する。

【００１６】

筒状体２０の一端部２１を下向きにして、筒状体２０に僅かな衝撃を与えると、内部に収納されている治療鍼１０が筒状体２０の一端部２１の方に移動し、筒状体２０の内部は、他端部２２側の第１の折り離し可能部２３の付近では治療鍼がない空の状態になる。そこで、第１の折り離し可能部２３を折り離して、キャップ部（キャップ）２２’を分離した後、筒状体２０を傾斜させて治療鍼１０の柄部１２の端部を突出させ、これにキャップ２２’を被せる。更に、治療鍼１０の柄部１２を第１の異型部１３が筒状体２０の第２の異

型部２６に係止されるまで充分突出させると、筒状体２０の内部は、一端部２１から第２の折り離し可能部２４の位置まで空の状態になる。そこで、第２の折り離し可能部２４を折り離すと、針管部２５はその両端が開放された状態になる。

【００１７】

このようにして治療具１は、治療鍼１０に針管２５が脱落不能に嵌め込まれた治療可能状態となる。

【００１８】

すなわち、治療鍼１０の柄部１２に被せたキャップ２２’を持って針部１１を下に向けると、図５に示すように、針管２５は自重で下方に移動するが、針管２５の第２の異型部２６が治療鍼１０の柄部１２の第１の異型部１３に係止されるので、針管２５は治療鍼１０から抜け落ちない。また、針部１１は針管２５に覆われるので、治療者の指などが針部１１に触れるのを防止できる。一方、図６に示すように、針部１１を上に向けたときには柄部１２の端部に被せたキャップ２２’が針管２５を係止する。

【００１９】

治療に際しては、針管２５を指で支えてツボに当て、治療鍼１０の針部１１の先端を皮膚に刺し込むことができるので、どのように針部１１が細くとも針管２５に沿って皮膚に刺し込むことができ、治療前及び治療中ばかりでなく、治療後においても針部１１を指で触れる必要がなく、患者及び治療者の双方にとって極めて安全である。

【図面の簡単な説明】

【図１】本発明の治療具の一実施例の構成を示す平面図。

【図２】図１の治療具を構成する筒状体の正面図。

【図３】図１の治療具を構成する筒状体の一部の拡大断面図。

【図４】図３のＩＶ－ＩＶ線端面図。

【図５】図１の治療具の使用状態の斜視図。

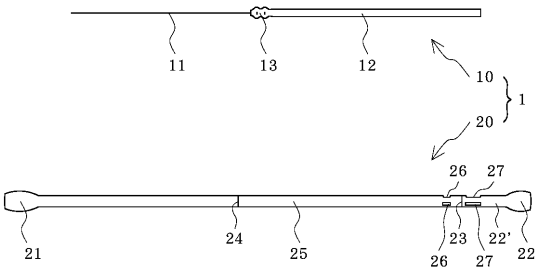
【図６】図１の治療具の使用状態の斜視図。

【符号の説明】

１…治療具、１０…治療鍼、１１…針部、１２…柄部、１３…第１の異型部、２０…筒状体、２１，２２…端部、２２’…キャップ部、２３…第１の折り離し可能部、２４…第２の折り離し可能部、２５…針管部、２６…第２の異型部、２７…第３の異型部。

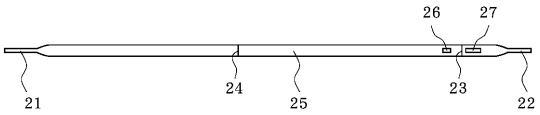
【図１】

FIG.1



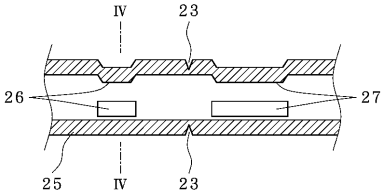
【図２】

FIG.2



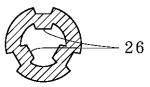
【図３】

FIG.3



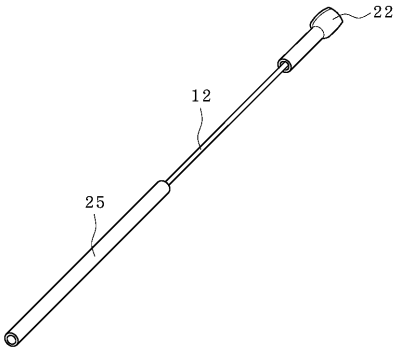
【図４】

FIG.4



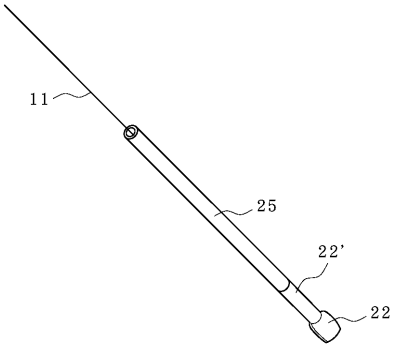
【図５】

FIG.5



【図６】

FIG.6



フロントページの続き

(58)調査した分野(Int.Cl.[7], ＤＢ名)
A61H 39/08